



**Data** 2024-68

監督・脚本：傅天余（フー・ティエンユー）

製作：呉念真（ウー・ニエンチェン）

出演：陸小芬（ルー・シャオフェン）  
／傅孟柏（フー・モンポー）  
／陳庭妮（アニー・チェン）  
／方志友（ファン・ジューヨウ）  
／施名帥（シー・ミンシュアイ）  
／陳柏霖（チェン・ポーリン）  
／林柏宏（リン・ポーホン）

## 👁️👁️ みどころ

大阪ではもとより私の故郷・松山でも、理髪店は激減してしまったが、台中には今なお傅天余（フー・ティエンユー）監督が生まれ育った「勝見理容庁」なる“家庭理髪”があるらしい。

夫と死に別れ、3 人の子供たちが独立しても、阿蕊（アールイ）は今なお店主として常連客を相手にハサミの音を響かせていたが、なぜ「本日公休」に？日本でも多発している老人の孤独死？いやいや、隣近所の間人間関係が薄れてしまった令和の時代の日本ではそれもありだが、台中では・・・？

“常連客”とはいいい言葉！13 歳で女性理容師への道を歩み始めたヒロインが師匠から叩き込まれたのは、「技術と誠意さえ尽くせば常連客は絶えない」ということだが、それは弁護士も同じ。弁護士業の基本も技術と誠意で、その成否のすべては人間関係にかかっている。弁護士 50 周年を迎え、そんな実感を強くしている私には、40 年間も店内に立つ中で形成されてきた常連客の大切さがよくわかる。仕事はカネではない！その通りだ。

しかして、お店に「本日公休」の札を掲げたアールイは一体何のためにちょっとしたロードムービーに？古き良き昭和の香りが台中で味わえるとは！



### ■□■原題も邦題と同じ！家庭理髪も日本と同じ？■□■

本作の英題は『Day Off』だが、原題は邦題と同じ『本日公休』。というよりも、原題の『本日公休』は、日本語でもそのまま『本日公休』になるということだ。小学生の頃は、台風が来て学校が臨時休校になれば喜んだものだが、40 年間にわたって店内に立ち、常連客を相手にハサミの音を響かせてきた肝玉お婆さん（？）阿蕊（アールイ）（陸小芬／ルー・シャオフェン）を店主とする、台中にある昔ながらの家庭理髪店は、なぜ「本日公休」

なの？ひょっとして、急に店主が倒れたの？既に夫とは死に別れているアールイは、1人で2階に居住しながら1階で勝見理容庁を営んでいたが、3人の子供たちは近くにいたはずだ。したがって、今の日本で社会問題になっている“孤独死”ではないはず。何よりも、孤独死なら、店の前に「本日公休」の札を出すこともできないはずだ。

愛媛県松山市生まれの私は、小学生の高学年の頃は勝見理容庁と同じような散髪屋に通っていたが、坊主頭になった中学生以降はもっぱら母親のバリカンで髪を切ってもらっていた。そのため、大学に進学してはじめて大学内の理髪店で散髪した時は実に新鮮だった。そんな私は寡聞にして理髪店を舞台にした映画はあまり知らないが、なぜ本作は、そんなタイトルに？

## ■プロデューサーは？監督は？脚本は？主演女優は？■

中国では、第5世代の張芸謀（チャン・イーモウ）監督と陳凱歌（チェン・カイコー）監督の2人が有名だが、台湾では何と言っても『悲情城市』（89年）（『シネマ17』350頁）の侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督と、『ヤンヤン 夏の思い出』（00年）の楊徳昌（エドワード・ヤン）監督が有名だ。しかし、本作をプロデュースしたのはエドワード・ヤン監督の『ヤンヤン 夏の思い出』で主演し、ホウ・シャオシェン監督の『悲情城市』の共同脚本で知られる台湾ニューシネマの重鎮、呉念真（ウー・ニエンチェン）だから、それに注目！

他方、中国では既に第8世代監督の活躍が顕著になり、現在公開中の『西湖畔（せいこはん）に生きる』の顧曉剛（グー・シャオガン）監督は、その旗手だ。それと同じように（？）本作の脚本を書き、監督した、1973年9月に台中で生まれたフー・ティエンユエ監督は、2009年に長編映画監督デビューした後、CMやMVを含めて多彩な才能を発揮している女性らしい。そんな彼女は2010年に本作のモデルとなった理髪師の母親を記録したドキュメンタリー映画を発表していたそうだから、本作はそれが“下敷き”になっているらしい。つまり、勝見理容庁はフー・ティエンユエ監督が子供時代を過ごした実家なのだ。しかし、パンフレットにあるフー・ティエンユエ監督インタビューでは、「4年前に実家に帰った時、母が電話で、遠くのお客さんの家まで行ってカットをすると話しているのが聞こえてきました。アールイの娘のように私も、こんな儲けのない話、なんで行かなきゃいけないの？と思っていたのですが、しばらくそのやり取りを聞いているうちに、これは面白いストーリーになると考え、それから1週間で脚本を書き上げました。」と語っている。

他方、中国映画と台湾映画に詳しい私でさえ全く知らなかったのが、本作で出ずっぱりの主演女優を務めた、1956年台北生まれのベテラン女優、ルー・シャオフエン。チラシには、「1999年以来、映画出演から遠ざかっていた『客途秋恨』（90）の名優ルー・シャオフエンが20年以上ぶりに銀幕に主演復帰。」と書かれている上、「ブランクを感じさせない演技で、台北電影獎 主演女優賞、大阪アジア映画祭 薬師真珠賞（俳優賞）を受賞」と書かれている。さらに、パンフレットを読むと、後に「台湾黒電影」と呼ばれて大ヒットし

た「社会写実路線作品」（内容は過激な性と暴力描写がある女の復讐もの）への出演が多かったと解説されているからビックリ！そんなベテラン女優がフー・ティエンユエ監督から送られてきた脚本を読んで、すぐに出演をOKしたの？それは、「監督、こういう脚本に出会うためには私はこの20年ずっと待っていたんです。この役をやり遂げたい」と彼女が語っていることから容易に推察できる。

## ■□■理容師の心構えや基本は、弁護士も同じ！■□■

男性中心だった台湾の理容師の世界に女性理容師が認知され始めたのは、戦後に国民党政府が來台してからのこと。アールイのモデルとなったフー・ティエンユエ監督の母親が家計を助けるために13歳で理容業に足を踏み入れ、技術を身につけたのはそんな時代だったらしい。そのため、アールイのお店にかかっている、朱色の文字で「勝美理髮廳 劉明吉贈」と書かれた大きな鏡は、フー・ティエンユエ監督のお母さんが自分のお店を開いたときに弟子入り先のお店から贈られたものだ。

開店以降、アールイの理容庁にはずっと近所の常連客が通い続けていたが、夫と死別し、女手ひとりで育て上げた3人の子どもたちはすでに独立していたから、常連客がそれぞれいい年になったのと同じように、アールイも年を取ってきたのは仕方ない。とりわけ、毎日お店に立ち続けてきた膝は、限界に近いらしい。スクリーン上には、息子の卒業式に出席するために整髪にやってくる紳士、夢枕に立った亡き妻に「髪は黒いほうが良い」と言われ、初めて白髪染めにやってくる老人、等々が登場してくるので、その1人1人に対するアールイの対応ぶりに注目！アールイは開業以来ずっと「技術と誠意さえ尽くせば常連客は絶えない」という師匠の教えを忠実に守ってきたから、そのおかげで客のほとんどは常連客だ。したがって、しばらく来店がなければ、アールイの方からご機嫌伺いや近況報告を兼ねて電話することも。そんなアールイの営業形態では大きく儲けることができないのは当然だが、逆にお店の健全経営を続けるには十分らしい。

私が本作を見ながらずっと考えていたのは、理容師の仕事も弁護士の仕事も基本は同じだということだ。本作の新聞紙評は多いが、その1つに「『仕える事』と書いて仕事。それは同じ時を生きる他者を幸せにすることにほかならない」との記述があったが、それは理容に限った話ではない。まさに同感だ。私は2024年3月末をもって弁護士50周年を完了したが、私の依頼者はアールイと同じく、そのほとんどが常連客だ。それは私がアールイと同じように、弁護士として1人1人誠実に対応してきたおかげだ。本作のアールイは75歳の私より少し若いようだが、その仕事についての考え方や仕事を中心とした生き様は全く同じ。そんな思いと共感もあり、後半からクライマックスに向かうと思わず涙が・・・。

## ■□■“世代”のあり方に注目！監督の世代観がモロに！？■□■

現在75歳の私は“団塊の世代”だが、高齢化が進む日本国は今や後期高齢者でいっぱい。そのため医療費、介護費がかさむから、国家財政の維持は大変だ。それは大なり小なり台湾も同じだ。しかし、13歳で理容業に足を踏み入れ、夫とともに“家庭理髮”を営み、今

なお店主として毎日ハサミの音を鳴らしているアールイは、70歳前後だが、まだまだ現役バリバリだ。25歳で弁護士登録をした私は、75歳の今50周年を迎えたが、アールイは40年間にわたって、台中の下町で家庭理髪を営んできたのだから立派なものだ。

私はTV番組の『ふくあじ』や『孤独のグルメ』が大好きだが、それは夫婦で営む小さな食堂が常連客に長く愛されながら店を続けている姿が何の飾り気もなく映し出されているからだ。お笑い芸人を中心とした“出来レース”のような過剰演出のバカバカしい番組が氾濫する中、数少ない良心的番組の1つだ。もちろん、時代が進む中、とりわけ私のライフワークである都市再開発が進む都心部では、そのような良心的で懐かしい個人営業の店は淘汰され、街もビルもお店もサマ変わりしているが、本作に見る台中にあるアールイのお店とその周辺はまだ昔のまま、日本で言えば昭和の風景のままだ。

他方、そんなアールイの家庭理髪に定期的にやってくる常連客は、今や年寄りばかり。その中には、薄くなった白髪のために月1回の家庭理髪店通いが本当に必要なか否かも疑わしい男たちもいるが、アールイの言葉や技術を見ていると、どうやらそうでもないらしい。髪は薄くなっても、白くなっても、髪の毛をかっこよく見せたいと願う男の気持ちは変わらないらしい。逆に、中学生のガキはさまざまな流行や女の子の声に敏感だから、昭和の時代のグループサウンズのような長髪は極端だとしても、本作に登場するようなませた中学生(?)も時々アールイの店にやってくるらしい。しかし、本作を見ている限り、アールイの店は老人の客がほとんどだ。

アールイの長女・周佳欣(シン)(陳庭妮/アニー・チェン)は台北でスタイリストを、次女の周佳玲(リン)(方志友/ファン・ジーヨウ)はヘアサロンで美容師として雇われていた。一番下の男の子である周佳男(ナン)(施名帥/シー・ミンシュアイ)は定職に就かず、あれこれ夢みたいいな話ばかりしているから、典型的な今ドキの若者だ。また、陳立川(チュアン)(傅孟柏/フー・モンポー)と離婚した次女のリンは子供を引き取っているから、よく母親の店にやってくるし、自動車修理工をしているチュアンも近所に住む優しい男だから、長い間乗っているボルボの修理等で、何かとアールイの世話をしているらしい。時代が大きく変わる中、世代間の価値観の変化と承継は大変な問題で、我が家でもそれがうまくいっているとは言えない。それはアールイも同じだが、それでも家族が集まる習慣とチュアンの頼もしさが目立っているところが本作では素晴らしい。そんな設定の中で描かれる、本作の世代のあり方に注目!

## ■□■いつも通り?いつも通りで!主題歌『同款』に注目!■□■

“お馴染みの店”や“馴染みの客”という言葉は昭和の時代にはピッタリだが、令和の時代が終わる頃にはその言葉は死語になっているかもしれない。なぜなら、「お馴染みの店」や「馴染みの客」は、隣近所や仲間たちの人間関係が濃密なことを前提としているからだ。情報化社会が進む中、スマホが進歩しSNSが進化・拡大したことは一面では確かに利点だが、反面では人間関係を希薄にしまったという大きな欠点がある。今や電車の中ではほとんどの人が自分のスマホと向き合うだけだから、老人が立っというが、幼児を抱い

た若いママが困っているようが、「そんなことには、我関せず！」の世界になってしまっている。私が弁護士登録をした1974年当時は、馴染みの喫茶店に入ると、「いつも通り？」と聞かれ、「ハイ」と答えると、お決まりのモーニングが出てきたが、今や大手のコーヒーショップに入れば、自分で容器やスプーン、そして砂糖やミルクを取らなければならないから大変だ。もちろん、店主と会話を交わすことなどあり得ない。しかし、本作では？

本作は概ね好評。そして、パンフレットには、山田洋次監督や脚本家の内館牧子氏、女優の風吹ジュンら多くの人々の本作へのコメントが掲載されている。もっとも、それはほとんど老人ばかりだから、きっと私と同じような感性の下で、本作に昭和の香りや懐かしさを感じ、シンパシーを覚えているためだろう。ちなみに、そこには私の大好きなTV番組『孤独のグルメ』の原作者であるマンガ家・久住昌之の「ボクが今作りたい映画だと思った」と題する一文もあるので、それにも注目！さらに、本作については、映画終了後、字幕が流れる中で洪佩瑜（ホン・ペイユ）が歌う主題歌『同款』の歌詞にも注目したい。これほど本作のテーマにピッタリな主題歌に感服！感服！

## ■□■「本日公休」の理由はあなた自身の目でしっかりと！■□■

私は台湾旅行に3度行ったが、台湾は4泊5日で島全体を観光できるから実に便利だ。私は台中が一番観光スポットが少ないと思っていたが、フー・ティエンユ監督おすすめの「台中MAP」を見れば・・・？本作は台中の「家庭理髪」を舞台とし、アールイを主人公にした“家族劇”だが、『男はつらいよ』と同じように（？）中盤はちょっとしたロードムービーになるので、それに注目！アールイが年季の入った愛用のシザーケースを持って向かうのは、長い間、離れた場所から通ってくれていた常連客の許先生（簡宗福）の家だ。彼が病に伏したことを知ったアールイは、店に「本日公休」の札をかけ、愛車に乗って彼の家に向かったわけだが、それは一体なぜ？出張に要する時間は？交通費は？そんな質問が出てくるのは当然だし、それを考えれば割に合わない仕事であることは誰の目にも明らかだが、なぜアールイはそんな行動を？それが本作のテーマだから、それをしっかり考えたい。なお、第93回アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演女優賞を受賞した名作『ノマドランド』（20年）（『シネマ48』24頁）は大変なロードムービーだったが、本作にはアールイが出張の途中で出会う農家の若者（陳柏霖／チェン・ボーリン）が登場し、劇中劇のようなほっこりしたロードムービーが登場するので、それにも注目！ヒッピーのような長髪だったこの若者が、アールイの散髪技術によっていかにかっこ良い髪型の青年に生まれ変わったかはもちろん、世代の異なるこの2人の出会いと語り合いの中でお互いに何が発見できたのか、をじっくりと味わいたい。そんな苦勞をして許医師の家にたどり着いたアールイが目にしたのは、病床に伏し、もはや起き上がることもできないかつての常連客の姿だったが、家族が見守る中、そこでアールイが見せた理容師としての力量とは？たったこれだけのストーリーながら、そんな静かなクライマックスの展開の中で私の目からは、思わず大粒の涙が・・・。

2024（令和6）年10月4日記